特集　視点を変える①

女子野球から考える男女共同参画

東近江バイオレッツ

特集01

みなさんの周りには、「普通」「当たり前」と思っている自分の基準で考えてみると、「？」と思うようなことがありませんか。しかし、それは、あくまでも「あなた」の中での基準で決めつけてしまっているから起こることなのかもしれません。

自分の中にある「こうだ！」と思っている決めつけや基準について、少し周りを見渡しながら考えてみませんか。

8月2日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で、第26回 全国高校女子硬式野球選手権大会の決勝が行われました。昨年に引き続き、2年連続での甲子園決勝開催となりました。

滋賀県にも、女子野球で活躍されているチームがあります。

東近江バイオレッツ

東近江市を拠点に活動する滋賀県の女子硬式野球社会人クラブチーム、『**東近江バイオレッツ**』。「地域に住み、地域で働き、野球で日本一を目指す」チームとして、地域のみなさんと交流しながら活動されています。

第13回関西女子硬式野球選手権ラッキートーナメント大会で優勝され、第17回全日本女子硬式クラブ野球選手権大会に向け、練習に取り組んでおられる中、選手おふたりにインタビューにお答えいただきました。

野球をはじめたきっかけは？

戸室さん（以下 戸）兄と祖父の影響で野球を始めました。小さなころから野球が遊びでした。

平井さん（以下 平）兄2人が野球をやっていて影響を受けました。周りの子がサッカーをしていたので、はじめはサッカーをやりたかったのですが、やってみたら楽しくて「野球がやりたい」となりました。

第13回関西女子硬式野球選手権大会
優勝おめでとうございます!!

今回お話をお伺いしたおふたり

とむろ　ちなみ
戸室 知奈美さん
＃10　内野手

ひらい　なお
平井 菜生さん
＃27　捕手

学生のころはどのように過ごしてきましたか？

〈小学校〉

戸 兄がキャッチャーだったので、ピッチング練習をしたり、公園で壁あてをしていました。一年生からちびっこ大会に出ていて、その時は他にも女の子が3人いましたが、四年生で少年野球チームに所属したのは一人でした。

平 三年生の夏に、兄について一緒に行っていたチームの監督に声をかけてもらってチームに所属しました。小学生の頃には、野球をすること、続けていくことは夢になっていました。

〈中学・高校〉

戸 平日は、男子野球部で練習していました。女子は一人でした。中高一貫校に進学したので、中学生としては一人でしたが、高校にも一人おられて、中学校の方で練習してくださったので、一・二年の時には大きな存在でした。土日は、女子の硬式野球で練習をしていました。

当時、困ったことは着替えでした。男子はその辺で着替えをしますが、その辺で着替えることはできないので、すぐに着替えられなかったり、トイレで着替えたりする必要がありました。また、思春期のためか、こちらが気にしていなくても男子は気になったようで、二人一組でするペアストレッチのときは、ペアになれずに一人でしていました。

平 ボーイズ（クラブチーム）で活動していました。中学校進学時に軟式か硬式かで迷いましたが、高校では硬式になるので、硬式に決めました。それまで、ピアノなど習い事は続かないことが多かったのですが、野球についてはやめるという考えはありませんでした。生活の一部になっていました。この間も兄2人が練習を見たり、教えたりしてくれました。

チーム内の同級生にあと2人女子がいましたが、他チームにはいなかったので、珍しかったかもしれません。思春期特有で男子が女子を避ける行動があり、女子の隣に並ばないようにしたり、しゃべらないようにしたりと避けられていると感じることが多かったです。一対一だと話してくれましたが、周りのからかいがあり、恥ずかしさからか周りの目を気にしての行動だったのだと思います。

高校は女子野球部のある高校に進学しました。実家の地元にも女子野球部のある高校はありましたが、他の高校も調べて、いろいろ実際に見に行って京都の高校を選択して進学しました。

高校時代には進路について、野球をあきらめないといけないと思ったこともありましたが、プロになるという夢に向かってテストを受けました。

やりがい・達成感を感じるのはどんなとき？

戸 できなかったことが練習してできるようになることです。野球はひとりではできません。みんなでチーム一つになれること、全員で何かをやり遂げられるとやりがいを実感できます。

平 学校のテストなどと違ってすぐには結果がでないからこそ、結果がでたときには達成感ややりがいを感じます。今までできなかったことができるようになったり、試合に勝てたりすることも達成感があります。

ジェンダーの視点から気づかれたことは？

戸 サービスエリアなどの女子トイレを利用すると「えっ？」という顔をされたり、トイレの標識を確認されたりすることも多いです。また、小学校の低学年など小さい子どもからは「どっちなん？」「男の人？女の人？」と聞かれることがよくあるので、その度に「女の人だよ。」と答えています。

「何のスポーツをやっているの？ソフトボール？」と聞かれ、「野球です。」と答えているのに、「ソフトボールじゃないの。」と言われることがあります。女子がこのスタイル（ユニフォーム）でするのはソフトボールというイメージがあるのかもしれません。しかし、今は、女子高校野球も甲子園で決勝戦が行われたり、春の大会は東京ドームで決勝が行われたりするようになりました。男子チームが減っている中で女子チームは増えてきています。強豪校が女子チームも作るようになったり（ユニフォームも同じ）、クラブチームも（プロ野球12球団も）増えてきたり女子野球が盛り上がってきていて、認知されてきていると感じています。

平 野球は男子のスポーツだと思われていて、男子の野球に比べると女子の野球はまだまだ知られていません。女子野球をしていると言うと、「えっ、女子野球？」と言われます。また、「男子に比べると、レベルが低い（スピードや力など）と言われることもありますし、そういった声を聞くことも少なくありません。一生懸命やっていることを見てもらうことで、見方を変えてもらえることもあります。「初めて見たけど、おもしろい。」「女子ならではの良さがある。」と言った声もいただくようになりました。女子にしかないいい部分がたくさんあります。男とか女とかそういったくくりがなくなるといいと思っています。

これからの社会に望むこと

戸 男女関係なく、固定的偏見をなくしていき、誰もが生きやすい社会になってほしいです。野球も、サッカーも、その他のスポーツも性別にかかわりなくやっていい、これが当たり前になっていくようになることを望んでいます。同じスポーツでも女子にしかないプレイスタイルや雰囲気もあります。スポーツはスポーツ、偏見なくやっていけたらいいと思います。

平 社会的には、以前と比べると男女の壁が薄くなってきている部分もあると思いますが、まだ、壁を作っているものや根強くジェンダーバイアスもあります。女子だから、男子だからではなく、誰もが幸せに暮らせることを望みます。できるはずのものもできないと決められてしまうような壁がなくなればいいと思います。

最後に、これから将来を切り拓いていく子どもたちへのメッセージをお願いします

戸 周りに何かを言われたとしても、自分のやりたいことを貫き通して、やりたい道を進んでほしいです。それによって、周りも変わっていきます。自分の思うようにやりたいことをやってほしいと思います。

平 自分がやりたいことを素直にやってほしいです。周りの批判や無理というような声もあるかもしれませんが、自分のやりたいことをやってみる方がいいと思います。やってみて失敗することもあります。でも、その失敗はそのあと必ず自分の役に立ちます。自分の人生だからこそ、自分のやりたいことをして失敗したとしても学ぶことがあります。まっすぐに自分を信じてやってみてほしいと思います。